

## 青銅の武器と弥生人－那珂遺跡群の調査成果より

福岡市埋蔵文化財課 常松 幹雄

### はなしの要点

- A. 北部九州において武器の副葬が始まるのは、玄界灘に近い雑餉隈遺跡(福岡市)の木棺土壙墓や田久松ヶ浦遺跡(宗像市)の石槨墓にともなう磨製石剣や磨製石鏃である。それらの墓は、副葬小壺の型式から弥生早期から前期(水稻耕作の開始期)頃である。
- B. 中国東北地方に起源をもつ銅剣や銅鏃は、弥生前期のはじめまでに将来されたが、当時の青銅器の情報は断片的で、生産には直結しなかった。青銅武器の副葬が本格化するの、弥生中期初頭以降である。
- C. 初期の青銅器文化に大きな影響を及ぼした朝鮮半島では、銅剣単独の段階を経て、銅矛と銅戈が加わった。一方北部九州では、銅剣・銅矛・銅戈の3種が同時に出現する。これは朝鮮と弥生文化における青銅武器の出現過程の差異である。
- D. 新発見の鋳型によって、青銅器の生産と流通は今後もしばらくは見直しが迫られるであろう。

### 青銅武器発見の動向

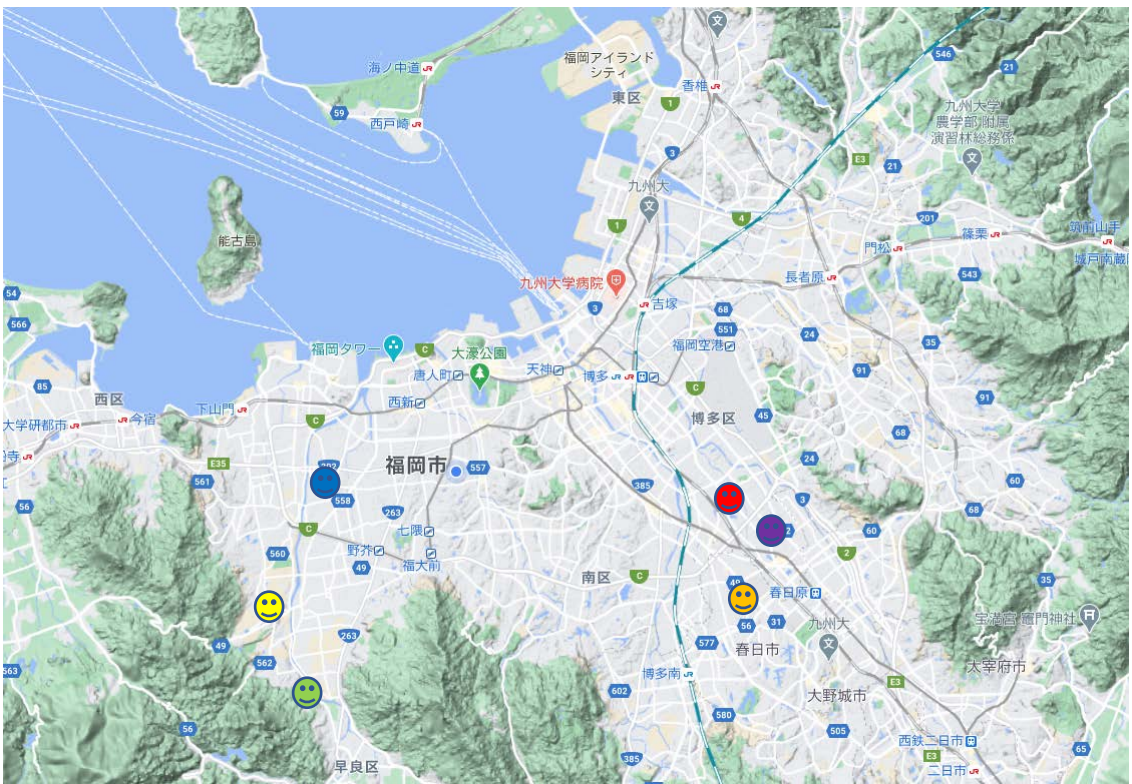
- 1980年代のはじめまで福岡市内の初期青銅器は、板付田端出土の銅剣・銅矛(東京国立博物館所蔵)や有田遺跡の銅戈が知られるくらいだった。
- 1983年吉武樋渡、1984年吉武高木、1985年吉武大石、これらの調査で30点近い青銅器が出土し、注目された。
- 実戦的な形の青銅武器は、朝鮮半島から輸入品と考えられていた。
- 青銅器の鋳型は、九州では石製、近畿では石製から土製へ変化すると考えられていた。剣の把頭飾りや巴形銅器など石製では製作困難なため、土製鋳型の存在を主張する説が出てきた。
- 2014年、須玖タカウタ遺跡(春日市)で石製とともに土製鋳型が出土した。
- 2020年、那珂遺跡群179次出土の銅剣鋳型は、初期の段階から福岡平野に青銅器生産の拠点であったことを補強する発見となった。

### 【須玖タカウタ遺跡発見の意義】

- 北部九州の青銅器の鋳型は石製(滑石・石英長石斑岩)とされてきたが、須玖タカウタでは石製とともに土製鋳型が出土した。
- 初期青銅器の鋳型類は、吉野ヶ里遺跡(吉野ヶ里町)や八ノ坪遺跡(熊本市)など無文土器の多い有明海沿岸部で確認されていた。
- 須玖タカウタ遺跡の土製・石製鋳型は、福岡平野に中期初頭段階の青銅器生産拠点が存在したことを印象づけた。

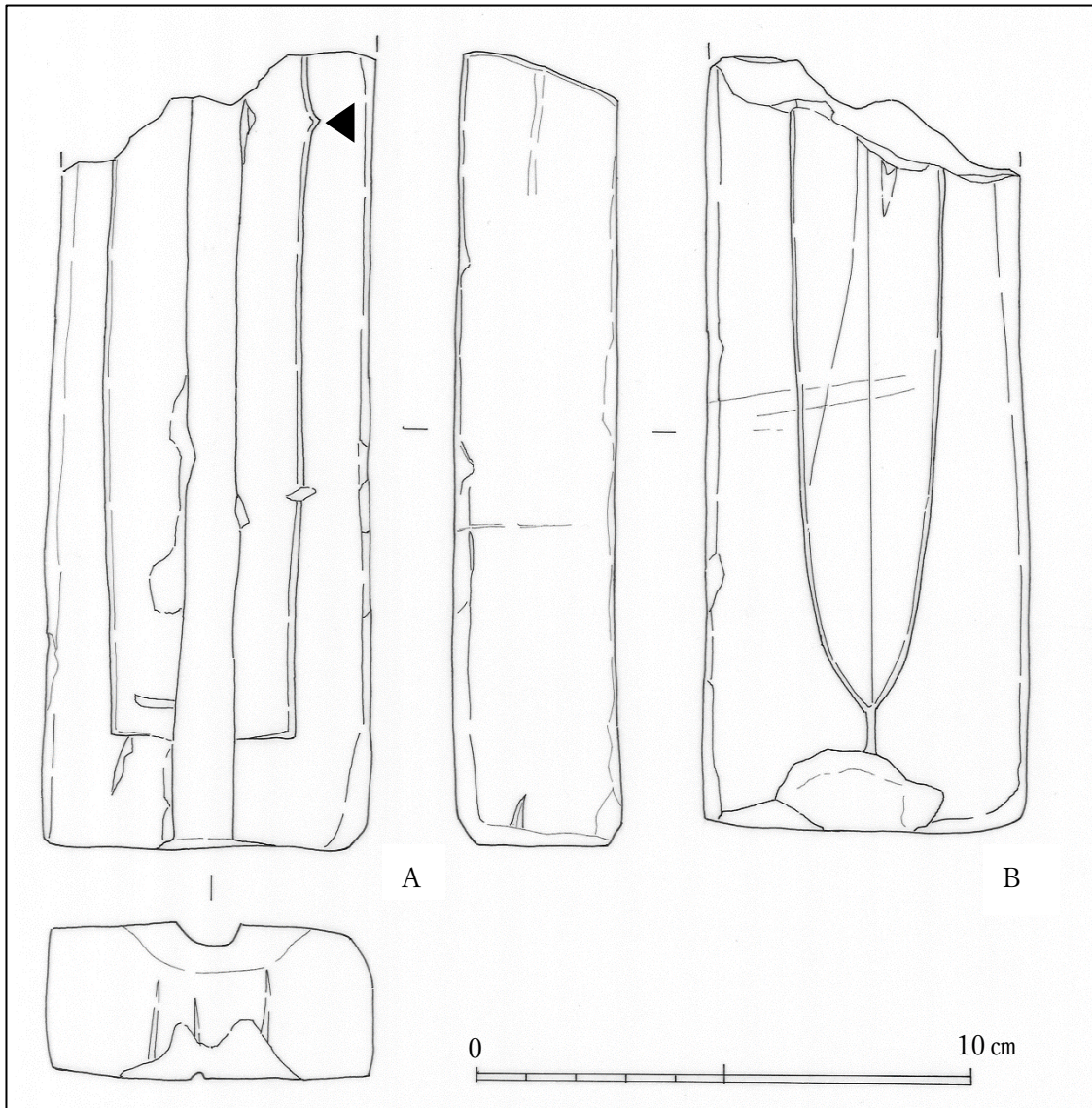


☹️ 那珂遺跡群 179 次調査区全景（東より）



☹️ 那珂遺跡群 ☺️ 須玖遺跡 🟪 板付田端 ☺️ 吉武高木 🟩 岸田 🟦 有田

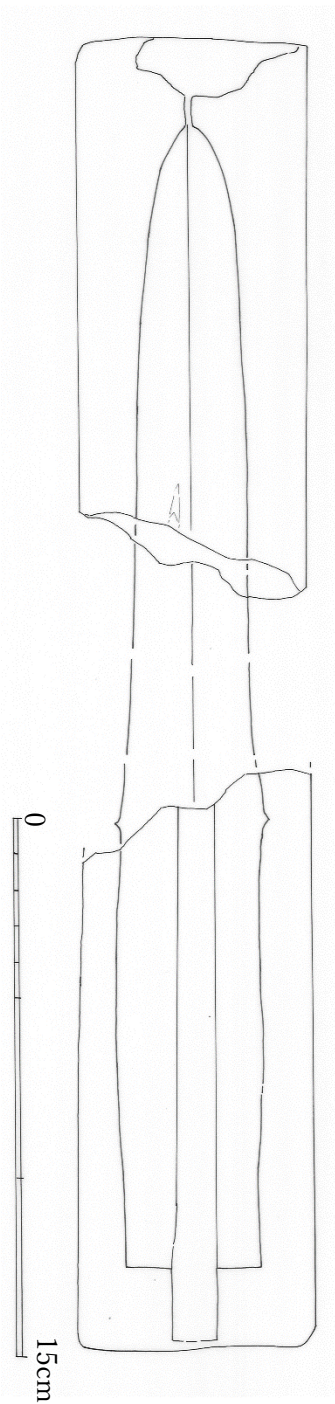
◇那珂遺跡群 179 次調査出土の鑄型



鑄型の特徴

- 現存長 16cm、幅 6.6cm。
- 両面范 (A・B 両面とも銅剣)
- A 面茎部に湯口の痕跡あり。
- A 面脊と刃部の断面はほぼ水平。
- B 面切っ先から線刻が派生。
- 湯口に線刻がある。
- 石材は滑石か。
- A 面上部に節帯の突起がある。

◇製品の復元 A・B 両面の画像から那珂遺跡の銅剣を推定。



銅剣の特徴

- 細形銅剣。
- 全長 33～35cm
- 最大幅 4.0cm。
- 先端から樋まで 9.5cm。
- 製品は見つかっていない。

【補足】

◆ 青銅武器研究のあゆみ

- 神田 孝平「銅剣のなかに銅剣・銅矛・銅戈がある」「銅剣は九州地方から出土する例が多い」⇒「筑紫鋒と称す」・「実用の具」「太古祭神の具」  
「銅鐸と青銅武器との分布の差に言及」1886 年
  
- 八木 英三郎『日本考古学』「銅鐸は畿内中心として南北に波及せるも南方は九州に達することなく、銅剣・銅鋒は九州西部の両筑を中心として東北に分布セルも東海諸国に達せザリシ」
  
- 梅原末治「早く銅鐸を作った民衆が引き続いて伝えられた漢代文化の影響の下に開展した」「文化が早く銅矛銅剣の表徴するそれと接触しついにこれを包括した」過程の中で古墳が発生変遷し「これがまた大和朝廷の成立に対する九州に早く現れた銅矛銅剣のその間接な一貢献とでも解すべき」⇒政治情勢の推移を分布から読みとる姿勢
  
- 中山平次郎「銅矛銅剣文化圏」=「鏡、玉、剣からなる三種の神器の原型」「大和朝廷を建設されたわが皇室がそれを征服、諸要素を吸収」さらに「神武天皇の東征によって近畿地方に移動」⇒「銅矛銅剣文化圏」が「銅鐸文化圏を併合」その結果日本列島の国家統一が完成  
「文化圏」⇒「国家生成における勢力図」を読む
  
- 森本六爾 「1 九州の銅矛銅剣分布区域」  
「2 中国の矛剣と鐸の分布区域」  
「3 近畿の銅鐸分布区域」  
「4 中部地方の上述金属器消失過程区域」  
「5 関東の上述金属器消滅区域」  
「6 それらから問題外の東北区域」
  
- 小林行雄「国産銅利器」は地下に埋蔵という点で銅鐸と共通、「ある時期における祭りの形態の一部」⇒「銅利器文化圏」「銅鐸文化圏」「青銅器に関しブランクな文化圏」

## ◆青銅祭器の二つの文化圏

### ○和辻 哲郎 1939『改稿 日本古代文化』

「前漢のころ百余国」⇒「邪馬台国 卑弥呼」⇒大和の勢力（神武東征）

弥生時代中期にあった「銅鐸文化と銅矛銅剣文化の対峙」

2世紀筑紫起源の「鏡玉剣尊崇の伝統が東方の銅鐸の中心地にはいる」

⇒「銅鐸尊崇が消滅」=「神武東征」⇒「古墳の発生…大和朝廷の全国統一」

◎文化と政治を同一視

※天皇制を頂点とする支配体制を肯定するため近代合理主義的な衣として考古学の研究成果を援用

### ○藤間 生大 1951『日本民族の形成』「青銅器の分布圏」を「政治圏」

瀬戸内海沿岸の首長に青銅武器や銅鐸が権威の象徴として提供

「心理的な共通性と統一性」「北九州邪馬台国を中心とする諸国家」「畿内国家」を生み

後者が前者を征服するなかで「民族統一国家」が誕生

### ○原田 大六「三種の神器」「神武東征」「北部九州における古墳の原型」

### ○小林行雄「銅鐸と銅剣銅矛の分布」

- ・表面的な銅鐸と銅剣銅矛との表面的な分布状態の差異に、神々の物語を連想することはやはり幻想を追うことになる。
- ・銅鐸製作の原料に相当数の銅利器が使われた。
- ・もともと東にも多量の輸入銅利器があった可能性がある。
- ・銅鐸と銅利器の分布圏の対立は国産銅器に限って考えるべき。

◎年代論や分布論に終始し、青銅祭器の歴史的評価や歴史的機能の推定は戦前戦後の研究の延長上にある。

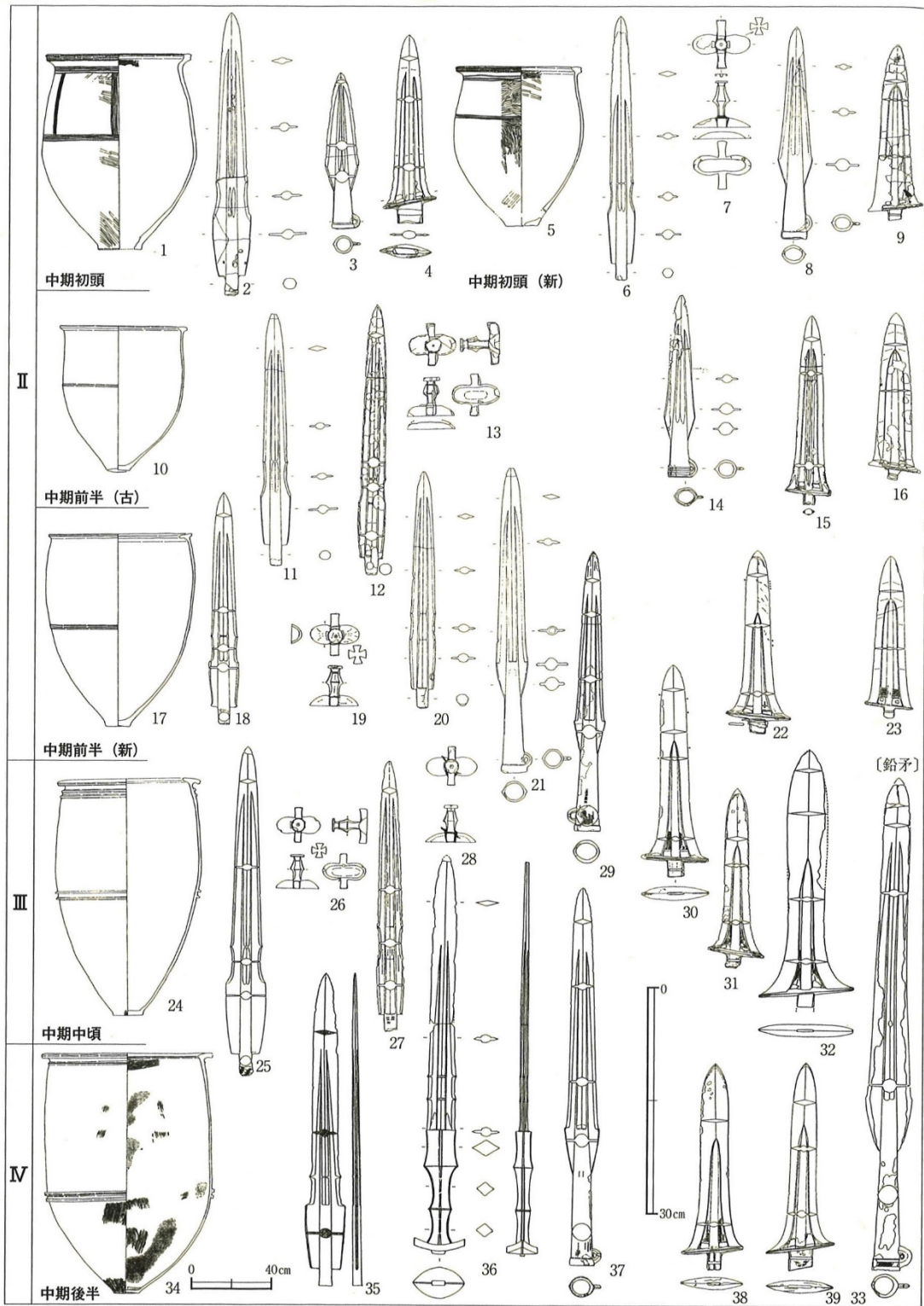
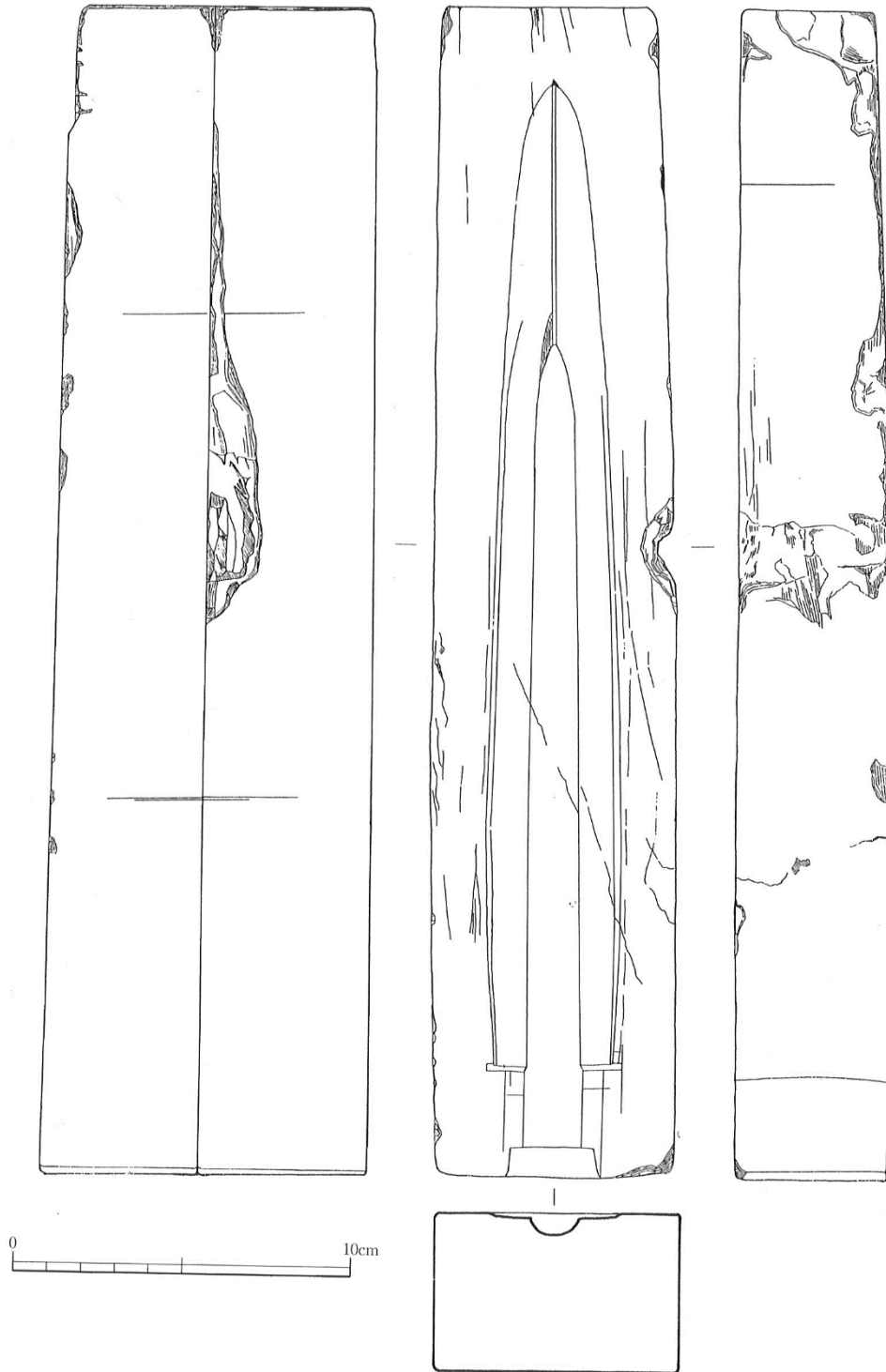


図1 弥生時代の薨棺と副葬青銅器の変遷(薨棺1/30、青銅器1/8)

1: 岸田 K0471 2: 岸田 K0471 3: 吉武高木 M3 4: 馬渡・東ヶ浦 K2 5-8: 岸田 K0473 9: 有田 K2 10・11・14: 岸田 K491612 13: 野方久保 K5 15: 釈迦寺 SJ246 16: 久米 K23 17・20・21: 岸田 K0482 18: 比恵 6次 SK28 19: 袖比本村 SJ1124 22: 鎌田原 K9 23: 吉武大石 K53 24・27・28: 吉武橋渡 K75 25・26: 吉野ヶ里 SJ1067 29: 宇木汲田 K41 30: 鎌田原 K8 31: 須玖岡本 K13 32・33: 九里大牟田 K2 34: 上月隈 ST007 35: 本山彦一資料 36: 三雲南小路 37: 立岩 K10 38: 吹上 K2 39: 吹上 K6 (出典 1・5・10・17: 福岡市 1257集 3・24: 福岡市 461集 34: 福岡市 634集 4・9・15・16・18・19・22・23・25~31・33・37~39: 柳田 2010・2014 32: 井上・松浦 1993 35: 末永 1935 2・6・7・8・11・12・13・14・20・21・36: 筆者による)

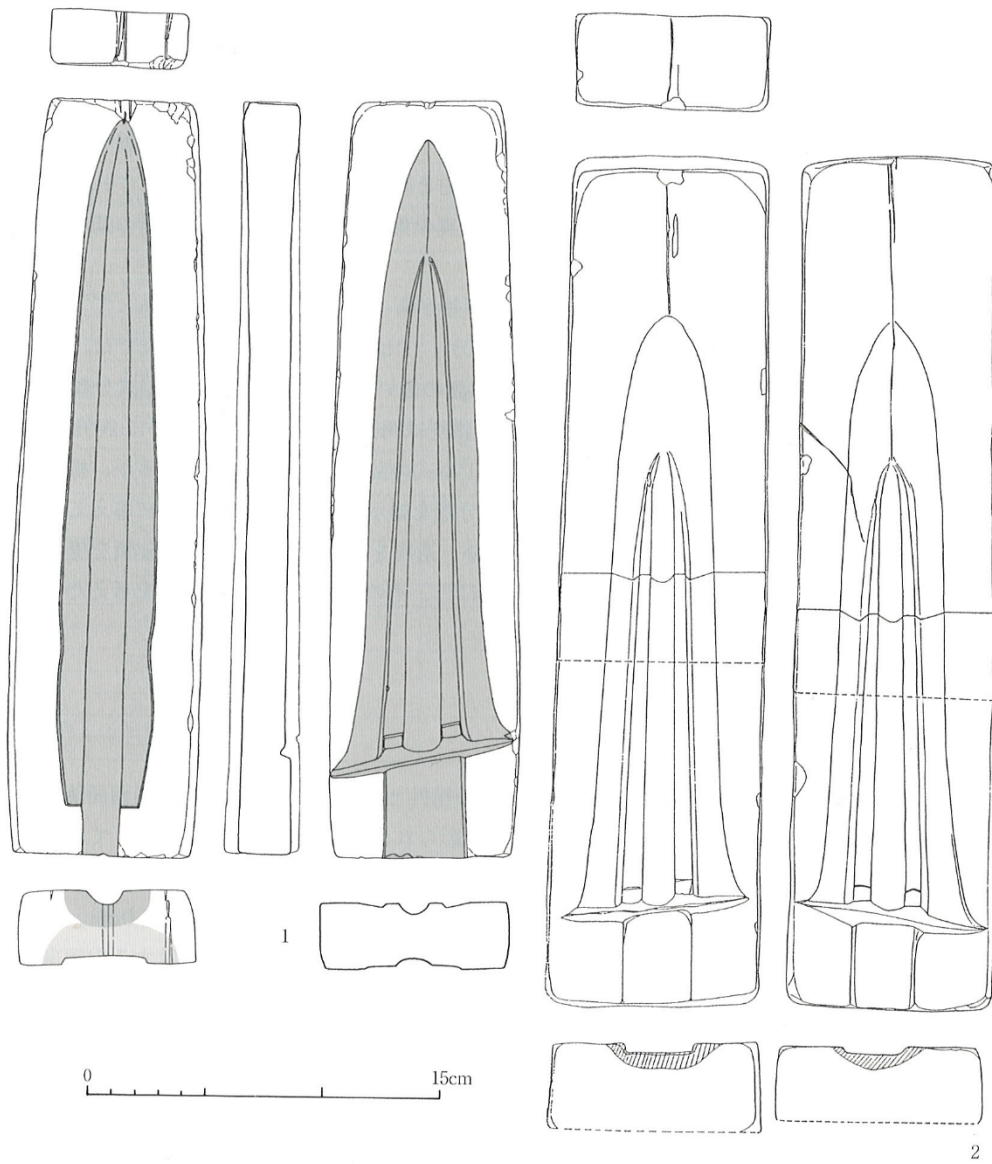
◇朝鮮半島の鑄型 1



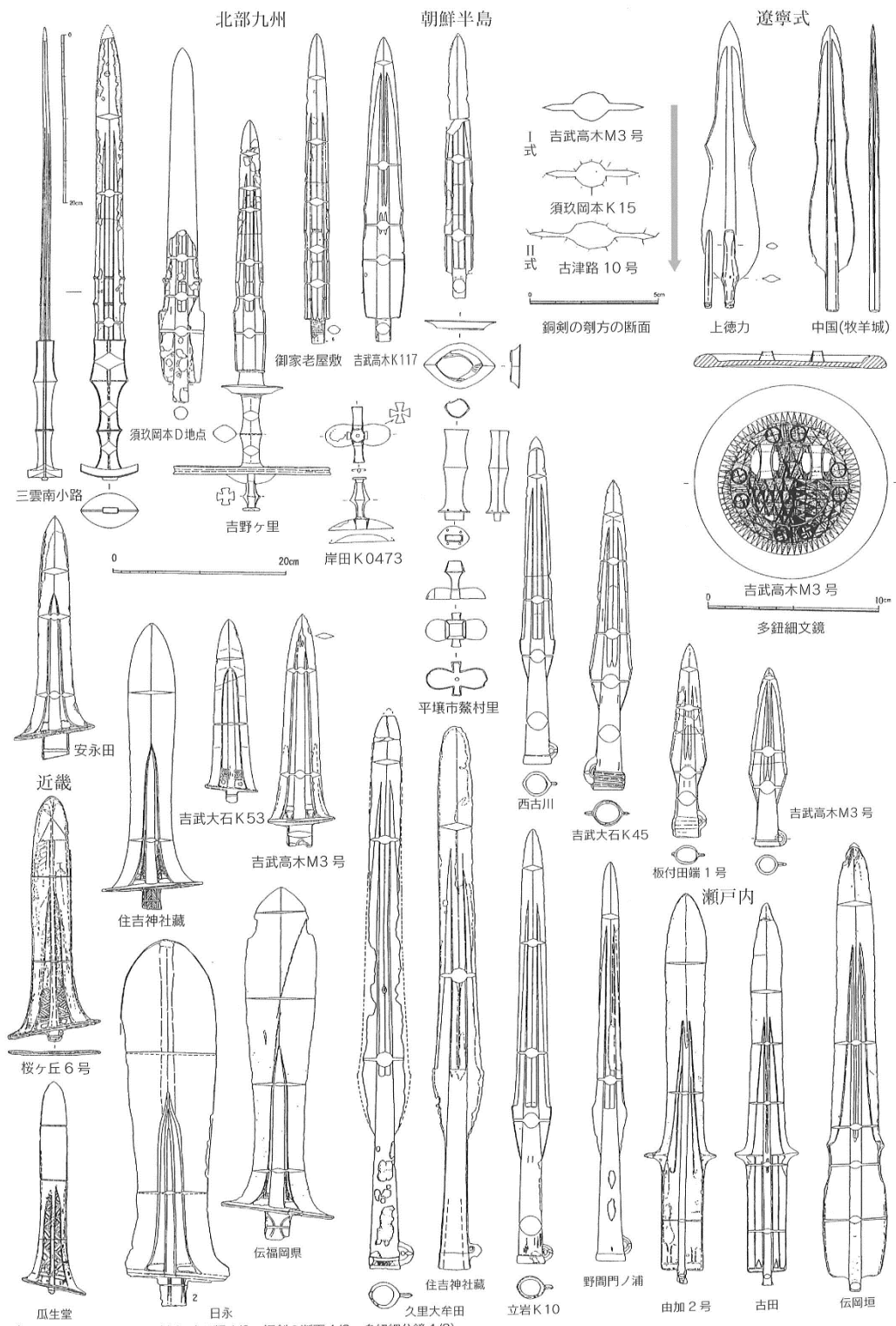
将泉里（平安南道大同郡栗里面）の銅劍鑄型



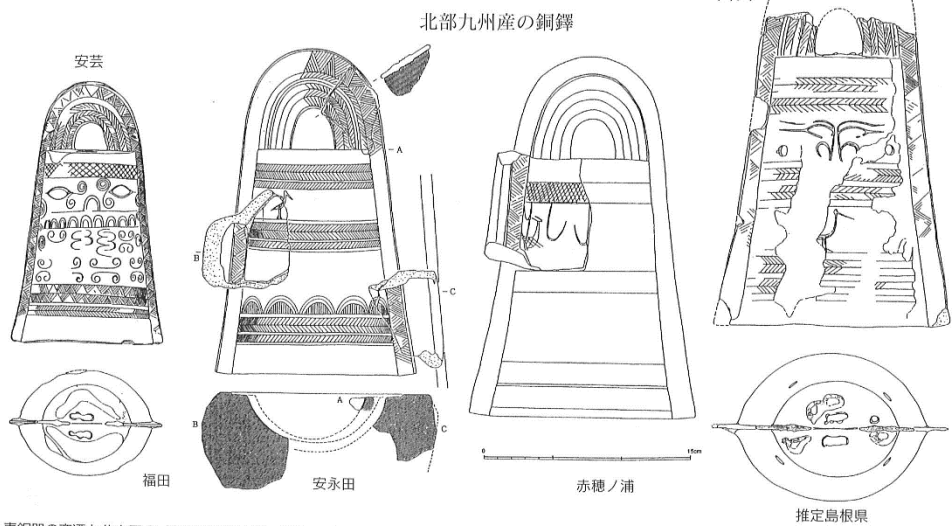
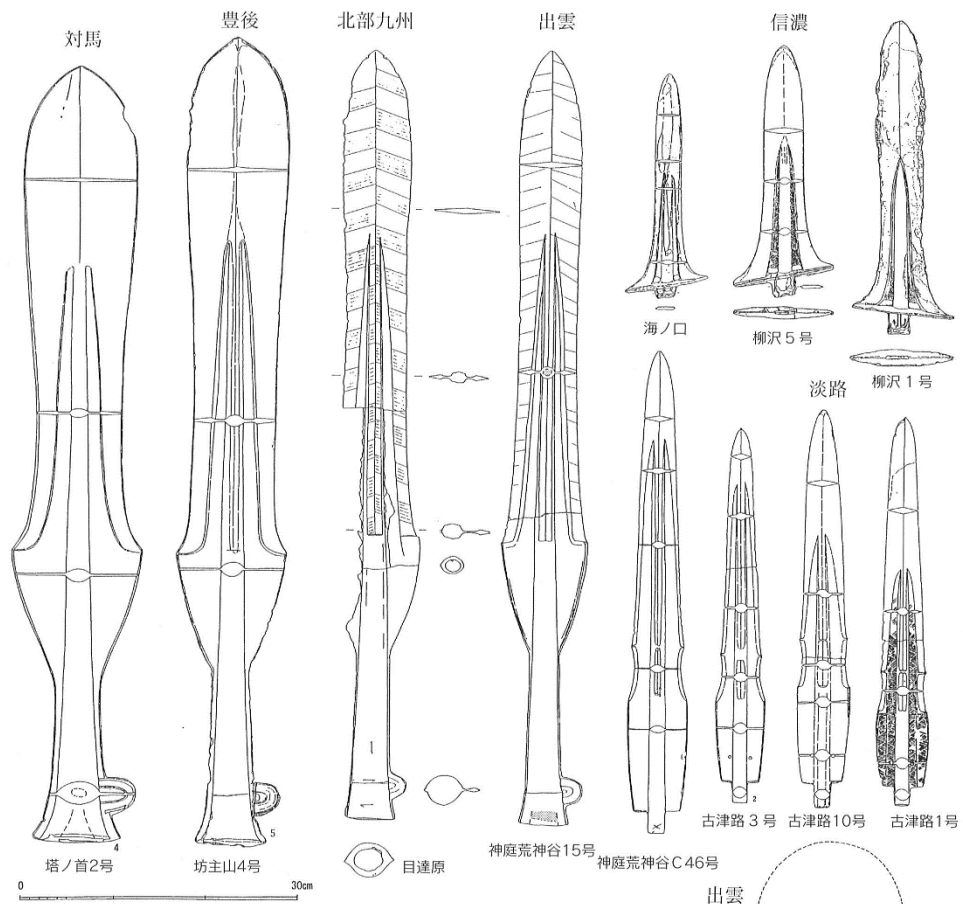
◇朝鮮半島の鋳型 2



葛洞遺跡（全羅北道完州郡葛洞）・伝靈岩（全羅南道 靈岩郡）出土の鋳型



青銅器の変遷と分布図1 (青銅武器類 1/6、銅剣の断面 1/2、多鈕細文鏡 1/3)



青銅器の変遷と分布図2 (青銅武器類 1/6、銅鐸 1/4)

## 【参考文献】

- G 後藤 直 2000「鋳型等の鋳造関係遺物による弥生時代青銅器の編年・系譜・技術に関する研究」  
東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室
- H 原 俊一（編）1999「田久松ヶ浦」『宗像市文化財調査報告書』第 47 集、宗像市教育委員会  
林田和人 2005「八ノ坪遺跡 I」熊本市教育委員会  
堀苑孝志 2005「雑餉隈遺跡 5」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第 868 集、福岡市教育委員会
- I 岩永省三 1980「弥生時代青銅器型式分類編年再考」『九州考古学』55 号、九州考古学会
- K 国立中央博物館・国立光州博物館 1992「特別展 韓国の青銅器文化」汎友社
- M 森井千賀子 2017「須玖タカウタ遺跡 3」『春日市文化財調査報告書』第 77 集、春日市教育委員会  
森貞次郎 1968「弥生時代における細形銅剣の流入について」『日本民族と南方文化』金関丈夫  
博士古稀記念委員会
- N 中山平次郎 1917「銅銚銅剣の新資料」『考古学雑誌』第 7 巻第 7 号、考古学会
- O 岡内三眞 1973「朝鮮出土の銅戈」『古代文化』第 25 巻第 9 号、〔財〕古代学協会
- S 七田忠昭 1997「吉野ヶ里遺跡」『佐賀県文化財調査報告書』第 132 集、佐賀県教育委員会
- T 高橋健自 1925『銅銚銅剣の研究』聚精堂  
東京国立博物館 2005「弥生遺物篇（金属器）増補改訂」『東京国立博物館図版目録』、中央公論  
美術出版  
常松幹雄 2015「青銅器の生産と流通」『新・奴国展』福岡市博物館  
常松幹雄 2016「弥生時代の青銅武器副葬」『季刊 考古学』第 135 号 雄山閣
- U 梅崎恵司（編）1989「上徳力遺跡 1」『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第 76 集、〔財〕北九  
州市教育文化事業団
- Y 柳田康雄 2005「青銅武器型式分類序論」『國學院大學考古学資料館紀要』21、國學院大學考古  
学資料館  
柳田康雄・平嶋文博 2009「福岡県筑前町東小田峯遺跡出土銅矛土製鋳型」『古代学研究』第 182  
号、古代学研究会  
柳田康雄 2010「日本出土青銅把頭飾と銅剣」『坪井清足先生卒寿記念論文集』坪井先生の卒寿  
をお祝いする会  
柳田康雄 2012b「武器形青銅器と創作青銅器」『東日本の弥生時代青銅器祭祀の研究』雄山閣  
柳田康雄 2014「鋳型と製品の対照」『日本・朝鮮半島の青銅武器研究』雄山閣  
吉田 広 2001a「弥生時代の武器形青銅器」『考古学資料集』21、国立歴史民俗博物館春成研  
究室  
吉田 広 2012「柳沢出土銅戈の位置づけ」『中野市 柳沢遺跡』長野県埋蔵文化財センター発  
掘調査報告書 100、長野県埋蔵文化財センター